

---

# VISITOR

響かほり

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

VISITOR

### 【Nコード】

N3500Y

### 【作者名】

響かほり

### 【あらすじ】

幼馴染で家がお隣同士の天羽香と、皆本祐。俺様な祐にいつも振り回される香は、いつものようにバイト帰りの祐の為に夕食を用意して待っていた。けれど、時間になっても帰ってこない幼馴染。その彼から電話がかかってくるが…

高校生の香を突如、襲う恐怖を描いたスプラッター系ホラーの『VISITOR』と、その後日談を書いたホラーは設定だけな祐視点のラブコメ『俺様ゾンビはお莫迦が好き』の二編を収納予定。



## V I S I T O R 1 (前書き)

このお話(V I S I T O R)は、スプラッター系ホラーで、些か残酷な描写が過ぎます。

V I S I T O R 1を読んで、これは駄目だと思われる方、想像力豊かでスプラッターが苦手な方、申し訳ございませんが速やかにB a c kでお願いします。

V I S I T O R 2はスプラッターやホラー映画がバツ来いな御方のみ、お進みください。

尚、V I S I T O Rを読まなくても、『俺様』のS T O R Yには一切、差し支えございません。

## VISITOR 1

鼻歌を歌いながら、おもつかあり天羽香は火にかけたシチューをおたまで焦げないようにかき回す。

「…それにしても遅いなあ、たすく祐」

幼馴染で、同じアパートの隣に住んでいる皆本祐が約束の時間になっても来ないので、香は思わず呟いていた。

香は母子家庭、祐は父子家庭。お互いに片親で、隣同士だから小さい頃はよく夜勤の仕事で親が留守になることが多い互いの家の都合もあって、どちらかの親が居ない日は、一緒に食事をするようになった。

それが小学三年生の時で、高校二年生の今に至るまで続いている。奇しくも、高校も同じ所に通っている祐の弁を引用すれば、『飯の準備が面倒くさいから、毎日俺の為に用意しやがれ』。

イケメンは性格が悪いと、香は常に思う。

最近、両親の不在を問わずに毎日食べにくるところか、昼の弁当まで要求する図々しい幼馴染の所為で、祐のファンと言う女子たちに、香は学校でねちねちとした嫌味や嫌がらせを受けている。

“どんな俺様よ、あいつ…何時か弓の的にしてやる”

と、素直に料理を作りながら香がいつも思っているのは、祐には秘密だ。

そうは思っているても、約束した時間には必ず戻って来る相手が、三十分も帰りが遅くなることはなかったので、流石に心配にはなる。

三十分ほど前には、異様な台数の緊急車両のサイレンが遠くから鳴り続けていたので、余計に。

ガスの火を止めて、携帯電話を取り出した香は、祐の携帯電話ナンバーを着信履歴から見つける。コールボタンを押そうとした瞬間、タイミング良く相手から電話が鳴る。

一瞬びくつとなった香だが、気を取り直して電話に出る。

「もしもし？今何時だと思ってる訳？」

開口一番、可愛げもなく相手に言い放ったが、相手側はしばらく無言だった。

「…祐？」

『カオリ…ミツケタ』

それは、幼馴染ではない知らない女の声。それも、喉が潰れた呻き声の様な声。

粘着質で猟奇じみた不快感を煽るそれに香は、異常性を感じて背筋が凍る。

『…オマエエ、コロオス』

思わず香は震える手で通話を切った。喉がカラカラに干上がって、上手く息もできない。

悪戯にしては性質の悪い冗談。そして、香はこの手の冗談が最も怖くて嫌いだった。

「うう…祐の奴…こ、こんな悪戯して…絶対許さないっ！」

怒りながらも、恐怖で震えが止まらない香の耳に、鍵が開いて扉

が開く音が届く。

位置的に祐の家だと気付いた香は、そつと玄関を開いて右隣の幼馴染の家をみる。

が、其処を見て香は眩暈を覚えた。

生臭い匂いと共に目に入った隣の家の半開きの玄関先には、夥しい血の痕。真新しいそれは、ドアノブにも玄関の扉にも擦り付けられている。

恐る恐る地面の血の跡を辿れば、道路の先まで続いている。

“こつ言つの、大っ嫌いなのにいつ！”

出来れば気絶したい。このまま、何もなかったかのように、この気色の悪い一連の事を忘却の彼方に捨て去りたいと香は思った。

しかし、これが本物の血なら、皆本家のどちらかが大怪我を負っている事になる。

恐いけれど無視もできず、意を決して香は隣の家の前に来る。

半開きの扉から見える部屋の中は薄暗く、様子を窺うことはできない。

「…くそつ…つてえ…」

そう遠くない部屋の中で、聞き慣れた男の声がする。でもそれは、痛みを堪え喰いしばったものの様に聞こえた。

「祐!？」

恐怖も忘れて、思わず真つ暗な部屋の中に飛び込んだ香は、電気をつけようとした。

しかし、その手を不意に掴まれて、壁に体を叩きつけられた。咄嗟に悲鳴を上げようとしたが、口を塞がれる。血の匂いがする

滑りとした大きな手に。

「声出すな…それから、電気点けんな」

間近で絞り出すように呟かれた言葉に、香は何度も頷く。すると口元の手はするりと離れる。

「このまま家帰れ。家中の鍵閉めて、外出るな。誰も入れるな」

相変わらずの上から口調にはむっとしたけれど、少しだけ暗闇に慣れて、ぼんやりと相手の顔を見た香は息をのむ。祐は眉間に皺をよせ、左腕を押さえながらフラフラとバスルームに向かって歩いていく。

彼に触れた口の周りは、血なまぐさい匂いがして、触れればぬるりとした嫌な感触。

祐が怪我をしていると、香は確信する。

「祐、どこ怪我したの？」

光の無いバスルームの前で、制服のワイシャツのボタンを外していた祐は、入り口でそう尋ねてきた相手に視線を向ける。

「堂々と覗くな、痴女」

「だ、誰が痴女よ！怪我の手当てするから、さっさと着替えてうちに来なさいよ！」

相変わらずの相手に怒りながら、香はそう言い残してさっさと自分の家に戻った。

だから香は気付かなかった。

「こんなもん、見せられる訳ねーだろ」

そう力なく呟いた祐の声を。

そして、壁にもたれたまま、ずるずるとへたり込んだ祐の、刃物で深く切りつけられた左腕と、その手で押さえられた右脇腹の止まらない夥しい出血に。

## VISITOR 2 (前書き)

些か、描写にエグイシーンがございます。  
そう言った物が苦手な方は、ご遠慮ください。

## VISITOR 2

+

それから祐が香の家に来たのは、二十分後だった。それは香が自分の顔と服に着いた祐の血を落とすのにかかった時間と、ほぼ同じだった。

「とりあえず、シチュー食わせろ」

「はあ？ 傷の手当てが先に決まってるでしょ」

やっと来たと思えば、遠慮もなく食事をたかる男に救急箱を開いて待ち構えていた香が呆れる。

「手当てしないなら、ご飯抜き」

「…ちっ」

食事が絡めば主導権は何時だって香の方。

ムスツとしたまま腕を差し出した祐の肌の色が、いつもより白い気がした。傷は十センチ程度、皮膚がぱっくりと裂けている。

既に血は止まっているが、結構深い。

香はその傷に眉根を寄せ、彼の腕を取った。が、その腕の異常な冷たさに驚く。

「つめたっ！」

「水風呂浴びた。で、血も止まった」

「…確かに血は止まってるけど…病院行った方がいいんじゃないのこれ？」

「めんどくせえ」

その一言で片づけた相手に溜め息を漏らし、念のために消毒液で傷を消毒し、ガーゼを当てて包帯を巻く。

「喧嘩でもしたの？」

「ストーカーに襲われた」

「チャラ男だもんねえ、祐さんは」

棘のある言い回しで、日頃の恨みを<sup>やゆ</sup>揶揄した香に、祐は鼻で笑う。

「なんだ、妬いてんのか？」

「自惚れ過ぎ。いい加減に彼女を一人に絞ってよね。とぼっちでいい迷惑よ」

むっとした香は、包帯を結び終えた腕を軽く叩く。祐は大袈裟に痛がって見せたあと、鼻で笑う。それは自嘲だった。

「惚れた女には何度も振られ続けてる」

「へえ…あんたを振る女っているんだ。世の中、捨てたもんじゃないわ」

「どついう意味だ」

「そのままの意味よ。それ、ちゃんと警察に届け出なさいよ？」

救急箱の中に広げたものを片付けて、立ち上がりとした香の手を、祐が握って止める。

新手の嫌がらせかと香は思ったが、自分より高い位置から見下ろして来る幼馴染の表情が、何かを堪える様に歪む。

「あ、痛み止め欲しかった？」  
「違う」

無然と呟いた祐に、香が首をかしげる。

「…あ、そう言えば、家に着く直前にあんたいたずら電話かけてきたでしょ？」

「電話？」

「そ。ケータイから。女の子使ってクロスとか言わせて」

「俺は電話してねえ…ってか、ストーカー女に盗まれて、奪い返すために揉めてざっくりやられたんだぞ？」

怒り混じりにそう答えた祐は、治療を終えた手を撫でる。

「それで怪我？」

「ああ。包丁振り回して、マジで殺されそうになったから、携帯電話も奪い返せずに逃げた。しかもその女、さつき死んだし」

「…は？死んだ？」

訳のわからない言葉に、香が眉根を寄せる。

「途中、遮断機の下りた線路抜けて…追っかけて来たその女が走ってきた電車に轢かれた…即死だって、救急隊が言ってたのを見て帰ってきた」

長い付き合いなだけに、彼が嘘を言う時は特有の癖があるので嘘ならば香は気付けた。だが、今それを告げる彼の言葉に癖の行為は見られなかった。

それに気付いて、香は表情を失い蒼白した顔で祐を見る。

「…た、祐…じゃ、じゃじゃじゃじゃ、じゃあ…あの電話」

オカルト物が太つ嫌いな香は、無意識に祐に縋り寄って、言葉も上手く喋れず涙目で相手を見る。

祐の方は、険しい表情のまま泣きそうな幼馴染の頭を軽く撫でる。

「心配すんな。どうにかする」

「ど、どうにかって…」

陰陽師や祓魔師<sup>エクソシスト</sup>でもあるまいしと、言葉が続けようとした彼女の言葉は続かなかった。

リビングの窓を破壊する激しい衝撃音で。

硝子が砕け散る音共に、閉ざされたカーテンが風ではためく。

揺らぐ隙間から覗く夜の世界に浮かび上がった物に、香は絶叫して祐にしがみつく。

「ちっ、しっこい女だな」

恐らく人であった物のなれの果て。

右半分の頭が原型もなく潰れ、削られ潰れて変形した顔は、二人を見てニタリと笑う。

左側に直角に九十度曲がった首は根元で半分千切れかかり、体はぐにやぐにやと軟体動物のような動きでずると割れたガラスの隙間から上半身を飛びこませた。

左の腕は肘からもげ、右手には血に染まった何かを握り締め、四つん這いになって身じろぎする度に、その体の一部が崩れて落ちる。

「ミイツウケタア…」

「いやああああっ！！」

電話の声とほぼ同じそれに、香が戦慄くと、祐が小柄な香を支えるように玄関へ向かう。

「タアスウ…クウ…」

縋るように呼ぶその声に、祐は「うぜえ」と舌打ちをする。

割れたガラスに体を突き刺す格好になっていた異形なものは、痛みも感じなければ知能も欠落したのか、自分を阻むものにも気付かずに必死で身を擦る。

遠くでサイレンの音がする。

祐は相手が動けない隙に玄関の扉を開け、足のおぼつかない香とともに外に出る。

その時、祐の耳に何とも言えない気持ちの悪い肉の千切れる音がした。同時に、ずるりと引きずるような音が聞こえる。

「逃げるぞ！」

そうはいつでも、恐怖で震える香の足は上手く歩けず縋れ、アパート沿いの道路をしばらく歩くように走った所で腰が抜けて座り込んでしまう。

「香！立て！」

「む、むり、ムリ、無理！祐だけ逃げて」

鋭く幼馴染を呼ぶ祐の声。だが香は首を大きく横に振る。声も震え、奥歯の根すら合わない彼女に、苛立ったように祐は舌打ちする。後ろからは、這っているとは思えない速度でスプラッターな存在

が寄って来る。

「莫迦か！置いていけるか！」

屈んだ祐は、香の体をぐつと抱きしめ、迫って来る相手を睨む。

「いい加減諦めろっ！香に手え出してしろ、お前の事なんざ永久的に存在そのもの忘れてやる！」

そんな言葉でいいのか？と、恐怖の中でも変に冷静な思考をめぐらせた香だったが、あと数歩程度の距離にまで近付いた相手は不意に動きを止める。

「…ヤダ…ヨウ…タスク…」

思いの外、効果てきめんだった言葉に、悲しげな顔を見せた元人だった存在は、祐を見つめる。香の事など眼中にないかのように。

「スウキイナアノ…ド、シイテ、ワワワタシ…ダダダダメ？」

言葉すら満足に離せなくなっている相手を、祐もじつと見下ろす。香も恐る恐る相手を見る。グロテスクな存在になってまで、追いかけて来る女の子。ストーカーになるくらい、祐の事が好きだったのだろうと思うと、恐いけれど憎めない気分になってくる。

「惚れた女以外に興味はねえし、優しくもしねえ。お前だからじゃねえ。初めからそう言った。分かって付き合って別れただろ」

刹那、恐怖も忘れて、香が人でなしな幼馴染の胸を怒り任せに叩く。

「あんだ、女の子の気持ちなんだと思ってるの！一途に好きだっていう気持ち弄んで、死んじゃってからも、いっぱい怪我しているのに追いかけるくらいあんだの事、好きにさせといて！ちゃんと、この子に謝りなさいっ！莫迦祐！」

猛抗議を受けて、祐は難しい顔をしながら呆れた様に溜め息をつくと、地面に伏せた相手を見る。

「…悪かった。片想いの辛さは分かったのに、お前に悪い事をした…」

「ごめんなさいの「ご」の字も満足に言った事の無い俺様男の素直な謝罪に、香は思わず目を見張る。

それは言われた本人も同じだったようで、顔の半分潰れた相手は、泣きそうな顔で笑う。

そして、握っていた右手を祐に伸ばし、そっと掌を広げる。

そこには、血に汚れてはいたけれど傷の付いていない祐の携帯電話。祐はその手からそっと自分の携帯電話を掴む。

力なく手を下ろし、次に彼女は香に視線を向けた。

「…ア、アアアリリリガガ、ガ、ガ…ト…ゴ…メ……………」

そう言って、相手は完全に動かなくなった。

しばらく二人はそのまま動けず、事前に祐が通報した警察が来るまで、ただそのまま動かなくなった相手を見つめていた。

## VISITOR 3

+

死体が動いたと世間が大騒動になって数日が経ち、慌ただしかった祐と香の生活も、ようやく普段と変わらなくなった。

色々恐い目にもあったが、二人は彼女の葬儀に出た。出棺まで見届けた後、制服姿のまま二人帰り道を歩いていた。

「あの子…死んでまであんたを追いかけるなんて、本当にあんたが好きだったんだね…こんなろくでなしなのに」

「うつせえな」

不満げに、祐が唸る。

執念かもしれない。ただ好きで好きで、その一念で、心が歪んでストーカーになって。

彼女がした行為は決して褒められることではないけれど、彼女が祐を好きだったという気持ちこそ非難するつもりは香にはない。

「で、あんたの好きな子って誰？あんたが人に優しくするなんて気持ち悪いけど、一度見てみたいわ、その相手」

「…鏡でも見る」

ぼそつと呟いた祐に、香は意味が解らないと首をかしげる。  
物分かりの悪い相手を引き寄せて、彼女を抱きしめる。

「な、ななな何？」

「解るか？俺の心臓、動いてないの」

何の冗談かと思ったが、そつと左胸に耳を押しあててみた香は、全く鼓動の聞こえない相手を見上げる。

そう言えば、幼馴染の顔色がずっと血色不良のままで、自分を抱きしめている祐に全く温もりがない事にようやく香は気付く。

「え、い、何時から？」

「あの事件から」

「う、うそ！？じゃ、何で動いているの？」

「…死んでも執念で生きたのは、あの女だけじゃねえって事だよ」

そう言つて、祐は香の唇に軽く口付ける。

熱の無い、冷たい口付けだった。

「俺は諦めねえ。お前を置いて逝かねえから、覚悟しろよ？」

ニヤリと不敵に笑った相手に、香はわなわなと震える。

「いやあああつ！！今すぐ成仏してえ！ファーストキスも返せえ！！莫迦祐っ！！」

泣きそうになりながら叫んだ香の声は、雲一つない空に吸い込まれるように響き渡る。

前途多難な彼女の横で、厄災を運ぶ男はただ嬉しそうに笑った。

END



### VISITOR 3（後書き）

本当は、一話まるっと短編で投稿したかったのですが、描写が描写なので、クッションを置く意味で三話に区切ってみました。

ドロドロな残酷描写ではありませんが、苦手な人は不快かと思われるので救済処置的な感じです。

どうしても作品がホラーになりきれなかったのは、自分の背後が怖くて仕方なかったから（笑）

閲覧いただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3500y/>

---

VISITOR

2011年11月11日10時42分発行